



Title	現代日本語形態論
Author(s)	宮地, 裕
Citation	大阪大学, 1974, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/31010
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 ＜a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed >大阪大学の博士論文について をご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

[2]

氏名・(本籍)	^{みや} 宮 ^じ 地 ^{ゆたか} 裕
学位の種類	文 学 博 士
学位記番号	第 3 1 1 7 号
学位授与の日付	昭和 49 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 5 条第 2 項該当
学位論文題目	現代日本語形態論
論文審査委員	(主査) 教 授 池上 禎造
	(副査) 教 授 田中 裕 教 授 毛利 可信

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、1. 序説、2. 形態・形態素、3. 語基・非語基、4. 語・接辞、5. 節・助辞、6. 形態分類、7. 和語の形態分類、8. 漢語の形態分類、9. 洋語の形態分類、10. 結語 の10章より成る。意図するところは、現代日本語の、意味を有する最小単位体「形態」を語構成・節構成との関連のもとに分類整理して体系化することにある。前半(2～5)で「形態」から節に至る広義形態論の体系をたて、後半(6～9)でこれを具体的資料によって、「語種」「類詞」の区別の下に「形態」の分類を試みたものである。[1]

本論文における「形態」は、単音(phone)の連結体で、語や節の構成要素をなし、意味を有する最小の形式を言う。ここに意味とは、判断・情意に対応するものや、関係概念に対応するものを含めるので、例えば、好キダ・勝ッタのダ・タも意味をもつものとして扱う。一般に形態論という語のさすところ必ずしも一様でないが、本論文にいうのは普通のより広義である。またしばしば「形態」の抽象である形態素(morpheme)の論を形態論というが、ここでは具体的なものを対象とし、形態素のことは主題でない。さて、「形態」について、その上位のレベルである語を構成する場合について、L. Bloomfield の自由形式であるか、結合形式であるかの視点から、それぞれ、自立形態と結合形態とに二分する。(例、自立——好キ・勝ッ 結合——勝ッ・ダ・タ) [2]

次に「形態」の第二次分類として、語の意味的基幹たり得るか否かという点から、「語基」となるものと、ならない「非語基」とに二分する。この考え方はBloomfieldの理論的土台形式(theoretical underlying forms)にほぼ該当する。前章で二分された自立形態にも結合形態にも、語基たり得るものがある。自立形態はすべて語基たり得るのみならず、語ともなり、語基たり得ないものは原則としてない。一方、結合形態で語基たり得るものは、前例で言えば「勝ッ」、その他カアサンのカア、および、俗ナ・接スルの俗・接などの漢語の場合で、自立しない形態だから語基たり得ないものが多い。逆に、

語基たり得ない形態は結合形態にのみ属する。すなわち、この非語基は接辞と助辞とである。〔3〕

「語」は「形態」の連結体であって、①語根 (base) ②母音交替 ③なびき ④接辞 の4要素に分ける。③は①②の後、接辞の前におこる変容に対して立てたもので、適当な術語がなく、江戸時代の一学者の用語を採ってつけてあるが、実態は、一段活用の母音の次の部分 (オキル、オキレ) などによく見られるものである。④はいわゆる助詞・助動詞の一部分 (バ・ナイ・タ・ウなど) を含む。このことは早く江戸時代から、ついで山田孝雄・橋本進吉・時枝誠記などを経て、最近まで論の多いところであるが、ことに服部四郎の「附属語と附属形式」の論と対照し、前者を助辞に、後者を接辞に対応させ種々の場合につき論ずる。〔4〕

「節」とは語が助辞を伴って文中で機能する形である。語が節として機能するために変容することを「屈折」と言い、節としての文法的機能の特徴的な性質を「格」と名づける。(例、主格・叙述格) しかし、節論は形態論の中で最も構文論に近い分野であって、助辞の機能分類は構文論にもなり得るが、形態論ではそこまでゆかず、切れつづきという概念による二分にとどめる。これはまた、さきに見た自立形態・結合形態に対応するのである。〔5〕

以上、単位体ごとに、形態以下について論じたので、これをふまえて具体的に様相を見るため、まず、語種別・類詞別に諸形態の分類を行う。語種とは和語・漢語・洋語のように、由来による区別をいう。類詞とは、いわゆる品詞分類の大きなもの、すなわち体言・用言の間に形容詞・形容動詞を用言からはずした相言をおき、四番目に副用言を副言と称した4種類のものをさす。資料としては国立国語研究所報告21・22・25「現代雑誌九十種の用語用字」の第1分冊の語彙表と第3分冊使用度数50以上の語彙の「基本度」順一覧表(1220語)および新明解国語辞典の関係部分を用いる。〔6〕

和語の形態分類は、まず自立形態・結合形態に二分し、前者を単一語基・複合語基に、後者を単一語基・非語基に、さらに非語基を接辞・助辞にそれぞれ二分した見出しを上欄にして、前章の資料から得たものを本欄の該当場所に排列表示する形式で、順次体言・相言・用言・副言各系の4種の表を掲げ、その表作成上の用意を注するとともに、表の示す傾向を述べる。

たまたま資料からは得られないが、日常普通に用いられるものや、挙例の一々についての同語異語の問題など、語彙なるが故の操作の困難さに言及する。内容上最も重大な点は体言・相言・用言・副言のいずれか一つにとどまるのでなく、二系以上にわたる兼用のもののあることである。ことに副言の他にわたるものに問題が多い。また、資料が同一のものから採られているので、欄を埋める粗密の度合はその数の多い少ないを示し、ことに欄の空白はもっと多くを語るかも知れない。(例えば和語の結合形態は非語基に重点がかかることから、いわゆる詞辞二分説が導かれよう)。かようにして、これらの表を漢語・洋語と重ね合わせてゆけば、それぞれの特性を示唆することになる。〔7〕

漢語の形態分類では、結合形態の語基の欄に、和語の場合と違って、単一語基の外に複合語基をたてる必要がある。単一語基には漢字一字ずつが入るが、複合語基には「国際」「一以外」や「仰々(しい)」「嬉々(と)」のような反覆語がある。また、単一語基には語の前置要素となる「各一」「総一」の類と、後置要素となる「一者」「一中」の類があることが見えるが、前置または後置に限られるものは少なく、両方にわたるほうが普通である。かつ、これらの中でも「各自」「総合」のような接頭辞といえない用法もあって、漢語の処理は複雑になる。相言系において著しいことは接辞「

「不」の存在である。用言系はいずれも接辞「一する」をとるが、それらの中にもサ変動詞から接辞までいくつかの段階があって単純ではない。漢語においては体相用、あるいは体相副など三系兼用のものがあらわれて、国語の中における多様な能力を示している。その意味的抽象性と形態的自由さのために、現代日本語の中で占める位置の大きさは、こういう面に反映しているのである。〔8〕

洋語については前述の資料の国語研究所報告では数が少ないので、便宜いま一方の資料により補わねばならないことも、この分野の状況を物語る。その用法も、体言系に属するものが圧倒的に多く、自立形態単一語基のほうに偏し、結合形態のほうに少なく、非語基は無い。漢語と対照的に、その勢力の弱いことが知られる。〔9〕

以上が章節展開の概要であるが、最後に本論文の位置を自ら顧みる。すなわち、副論文「文論」に見られるように、一旦は構文論への見通しをつけながら、ひるがえって最小形式たる「形態」から固めて、より高次の文論を期しての第一歩というのである。〔10〕

なお、本論文259枚（400字詰原稿用紙）のうち、その四分の一を越える注を含む。注とは称するが14項68枚、術語に関する研究史的なものなどを、ことさらに本文から外したもののように、「日本の形態論研究」などは、本論文の序論的な位置を占め、最後の「漢語接辞」は〔8〕で言及した「不」についての独立の論文のような量を占める。

論文の審査結果の要旨

さて、本論文の意義を一言でまとめるならば、未開拓の分野に、綿密な体系立てを試みたということになる。

語構成の研究は比較言語学上の必要もあって早くから進んでいた西洋に比し、わが国は格段に遅れていた。日本語の構造によることが大きい、文法学では対象外におかれたことも与っているであろう。近時この名をもつ成書がやっと一冊出たが、古代語に偏している。この時、現代の具体的語彙をふまえつつ、一方で構造言語学的視野で筋を通す体系化を試みた意義は大きい。6章以下に見られる形態分類の構想には先縦があるけれども、前半部における「形態」の周到な分析との関係において、しかも精選された資料をよりどころとして出された結果は高く評価されるであろう。

ただし、語彙の問題につながるので複雑な様相をおびるから、すべてが解決されたというものでもないことも勿論である。また、語を4種の要素に分ける方式について、本論文は凝集を求めすぎた余りか、説明不足であって難解である。また構造主義に内在する問題点が、かかるところに露呈されたのかも知れない。

次に、本論文は「形態」を中心にするが、上位の語・節を見通しての体系立てを試みたわけであるから、いわゆる文法のうち構文論を除いた他の面はほぼ（品詞分類はない）取りあげられている。その意味からも、未開拓領域に一つの提案をしたことになるのである。

そもそも、日本文法の研究は古代語を対象とすることから始まって、やっと今世紀初頭に現代語を対象とするものが現れたが、古代語文法の型に現代語をはめこんだものになって、なお今日もその因

習を残している。現代語の研究はむしろ部外者の、伝統にとらわれないものから始まって相当の成果を挙げてきたのである。その意味で、本論文が構造主義の立場から、既成文法における問題点を縦横に処理することは高く評価されるのである。

ところで、本論文は文体簡明、副論文とはかなり異なる。上述の如く強い凝集力があって強靱な論理と構成力を象徴するが、時に説明不足にもつながる。本文191枚というのはこういう性質からくるのであった。一方では、対象が言語なるが故の複雑さ、不規則性をふまえて柔軟な取扱いが到る処に見られ、むしろ歯切れの悪さを感じさせるような慎重さが見られる。「代表形態」の項などでは、過度の慎重さの余り曖昧さを免れないと思われる。かように、論述の態度の数々の長所は、同時に短所を含む場合があることは致し方ないであろう。

本論文のような、事実の記述でなく、体系樹立のものにあっては、部分部分について、異なった立場からの発言は当然あり得るであろうけれども、それは、この論文をいささかも損うものではない。文学博士の学位請求論文として、十分の価値あるものと認定する。